

## 2017年 西洋中世学会第9回大会

### ポスター報告要旨

報告者1	有川 隼人 Hayato ARIKAWA
所属	東京藝術大学大学院
発表題目	フィリッピーノ・リッピ作《マギの礼拝》——肖像画としての一考察——
英文タイトル	Filippino Lippi's <i>Adoration of the Magi</i> : A study on the functions of the portrait
<p>フィリッピーノ・リッピ（1457-1504）は、1496年にフィレンツェのサン・ドナート・ア・スコペート修道院のために《マギの礼拝》（ウフィツィ美術館所蔵）を制作する。本作品にはメディチ家傍系メンバーが描かれている。一方、画家の師であったボッティチェリも同主題作品を制作しているが、こちらにはメディチ家直系メンバーの肖像が描かれている。本発表ではこうした作品との比較を通して、フィリッピーノの作品が担った役割について考察する。</p>	
報告者2	石田 隆太 Ryuta ISHIDA
所属	日本学術振興会特別研究員 PD/慶應義塾大学訪問研究員
発表題目	天使の「種別化」論証——トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第8項を中心として
英文タイトル	Demonstration of Angels' Specification: focusing on Thomas Aquinas's <i>Quaestio disputata de spiritualibus creaturis</i> , a.8
<p>天使という特殊な存在者に関して、13世紀の神学者トマス・アクィナスは二つの根本的な主張を唱えている。それは、天使が非質料的であるという主張、および天使の数だけ天使には種があるという主張のことである。後者に関する議論を展開する著作としては、『「命題集」註解』、『対異教徒大全』、『神学大全』という体系的な著作のみならず、『定期討論集 霊的被造物について』を重要な著作として挙げる事ができる。その重要性について報告することにしたい。</p>	
報告者3	井上 果歩 Kaho INOUE
所属	東京藝術大学大学院/日本学術振興会特別研究員
発表題目	連結符の機能とその変遷
英文タイトル	Functions of Ligatures in Medieval and Renaissance Music
<p>連結符とは、主に中世・ルネサンス期に見られる音符で、複数の音を繋ぐ役割を持つ。9世紀頃より、単旋聖歌の中で旋律の抑揚を示すために用いられはじめたが、12・13世紀以降の計量音楽ではリズムを表す記号としても使われ、何十・何百種類もの連結符が考案された。一方で、その読解の複雑さ・難解</p>	

<p>さゆえに次第に廃れ、17世紀には「スラー」による記譜が一般化した。本発表では時代ごとの連結符の機能およびその隆盛・衰退を、理論書・楽譜写本の分析を通して考察する。</p>	
報告者 4	岩永 玲 Rei IWANAGA
所属	京都大学文学研究科
発表題目	中世前期におけるキリスト教石彫文化の展開 —ヨークシャー東部地域の事例を中心に—
英文タイトル	The Development of Early Medieval Stone Sculptures in Eastern Yorkshire
<p>キリスト教石彫は、中世前期のブリテン諸島においてキリスト教コミュニティの傘下で発達した、装飾を持つ石造記念碑・墓標の総称である。本発表では、当該期にヨーロッパ大陸との間で起こった人間集団の移動が、キリスト教石彫を生産する文化の展開に及ぼした影響について考察する。その前提として、ヨークシャー東部地域の資料を対象に、装飾の施文工程に着目し、その彫刻技術と文様構成という二つの側面から型式学的検討を行う。</p>	
報告者 5	植松 苑子 Sonoko UEMATSU
所属	東京藝術大学大学院
発表題目	ファイト・シュトース作クラクフの《マリア祭壇》—臨終のマリアと使徒の視線—
英文タイトル	Veit Stoss <i>The Kraków Mary altar: The Virgin's death and the Apostels' eyes</i>
<p>ファイト・シュトース（1448?-1533）の代表作《マリア祭壇》（1477-89、クラクフ、マリア教会）は、特異な図像的性質と高い彫刻技術によって、後期ゴシックの木彫祭壇の系譜における記念碑的な作品として位置づけられてきた。本報告では、軸となる聖母マリアの臨終場面をとりあげ、本祭壇の図像プログラム主題「救済におけるマリアの役割」と関連づけながら、死せるマリアを囲む使徒達の視線に込められた意図を考察する。</p>	
報告者 6	大島 弘 Hirosi Ohshima
所属	京都大学
発表題目	対等関係モデルから合致モデルへ——トマス・アキナスの真理概念——
英文タイトル	Adequation Model to Conformity Model: Concepts of Truth in Thomas Aquinas
<p>知性と事物との対等関係」というかの有名な定義のもとに総括されることの多いトマス・アキナスの真理論について、その理論的モデルが著作によって何らかの変遷をみせていることを、前期の著作である『真理論』および後期に属するとされる『神学大全』にもとづいて明らかにする。両著作における記述の相違とそこで用いられている語彙の変化から、トマスが後年には真理とは対等関係であるとする立場からの逸脱を見せていたことが示されるだろう。</p>	
<p>I will indicate the transition of the theoretical model in Thomas Aquinas' theory of truth, usually summarized by the famous definition “adaequatio intellectus et rei,” based on his two works <i>De Veritate</i> an early composition, and</p>	

<p><i>Summa Theologiae</i>, a later opus. I believe that the alterations in vocabulary and differences in both accounts regarding truth indicate that, in his later years, Aquinas departed from the position that truth is an adequation.</p>	
報告者 7	加藤 政夫 Masao KATO
所属	学習院高等科（教諭・世界史）
発表題目	高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—：事例⑦“封建制度”という教材の可能性について」
英文タイトル	European Medieval History in High School History Education: The Case of “Feudalism
<p>改訂作業の進む新指導要領においては、従来の「世界史 A・B」と「日本史 A・B」が統廃合され、「歴史総合」と「歴史探究」という科目が新設される見込みである。必修とされるであろう「歴史総合」では、主に取り扱う時代を近現代と限定しており、新指導要領のもとでの高等学校世界史では、「西洋中世」が取り扱われる時間や機会は大幅に減ることが予想される。新指導要領のもとでの高校世界史において、「西洋中世」を扱う余地を広げる可能性を検討するため、「封建制度」という教材について考察し、意見交換を図る。</p>	
報告者 8	岸田 菜摘 Natsumi KISHIDA
所属	早稲田大学文学研究科
発表題目	1054 年の「相互破門」とコンスタンティノープル総主教座の展開
英文タイトル	Mutual Excommunication of 1054” and the Development of the Patriarchate of Constantinople
<p>1054 年に東西教会で「相互破門」が起こった原因としては、しばしば改革教皇庁の出現というカトリック側の変化が語られる。しかし、コンスタンティノープル総主教ミカエル 1 世ケルラリオスをはじめとする正教会側の動向も無視できない要因である。本研究では「相互破門」の背景として、主にビザンツ帝国の領域拡大とともに生じた 11 世紀の宗教的問題に対するコンスタンティノープル総主教の対応に着目し、その方針と「相互破門」の議論に与えた影響を考察する。</p>	
報告者 9	北館 佳史 Yoshifumi KITADATE
所属	中央大学
発表題目	シトー会修道院ポンティニーの聖地化と装飾をめぐる論争
英文タイトル	Pontigny as Center of St Edmund’s Pilgrimage: A Dispute Over Ornament
<p>当初聖人崇敬から距離を置いたシトー会は 13 世紀に多様な展開を見せるが、ポンティニーの巡礼聖地化はこうした動きの特異な事例である。注目されるのは聖エドマンズの墓＝聖遺物容器の装飾をめぐる意見が対立し、共同体が分裂の危機に陥る経緯である。本報告では装飾を排する慣習を重視する立場とトマス・ベケット崇敬をモデルに聖地化を推進する立場が衝突した論争から再編される修道院のアイデンティティのあり方を考察する。</p>	

報告者 10	菅沼 起一 Kiichi SUGANUMA
所属	東京藝術大学大学院
発表題目	器楽奏者の最初期の「声」を巡って——15 世紀の楽譜・言説資料を中心に——
英文タイトル	Fifteenth-century Instrumental Practice: Sources and Diminution Technique
<p>西洋音楽史上、15 世紀は「器楽」に関する実践の記録が本格的に行われるようになる時代とされる。ここでは、所謂「器楽曲」のアーカイヴ化とその記譜法（タブラチュア）の運用、器楽奏者の名前や楽器に関する記述が相次いでなされた。本発表では、15 世紀の資料概要の報告と共に、当時の実践の要である「声楽曲の器楽演奏」に焦点をあて、『ファエンツァ写本 Codex Faenza』や初期タブラチュア資料に残る例から、声楽曲を楽器で演奏する際に施された装飾音の「様式性」を検証する。</p>	
報告者 11	田野崎 アンドレーア嵐 Andrea Arashi TANOSAKI
所属	東京大学大学院
発表題目	イングランド王ヘンリー2 世妃アリエノール・ダキテーヌの発給証書に見る家政の構造
英文タイトル	Structure of Queenly Household in the Charters Issued by Eleanor of Aquitaine as Queen of England
<p>フランスとイングランドの王妃となったアリエノール・ダキテーヌ（c. 1122-1204）は、自身が発給した証書の数と形式・内容の多様性において、同時代の他の王侯貴族夫人とは一線を画しているものの、彼女の証書の網羅的な調査・検討は未だ途上である。本報告では、イングランド王ヘンリー2 世妃時代（1154-1189）の発給証書を主な材料とし、ヘンリー2 世の発給証書や財務記録との比較から、「ポワトゥー出身者の宮廷」とも例えられる彼女自身の家政や側近たちについて、その構造の再検討を試みるものである。</p>	
報告者 12	沼 大地 Daichi NUMA
所属	東京大学大学院
発表題目	ロマノス 1 世レカペノスによる正統性主張における海の位置づけ
英文タイトル	The Role of the Sea in the Legitimization of Romanus I Lecapenus's Regime
<p>ビザンツ皇帝ロマノス 1 世レカペノスは、コンスタンティノープルでのクーデターを通じて帝位に就いた篡奪者であり、自身の皇帝としての正統性を示す必要を抱えていた。しかし、その主張にあたって彼の採った具体的措置については、同時代の皇帝たちのそれと比較して十分に注目がなされているとは言</p>	

<p>い難い。そこで本報告では、海軍出身の皇帝であるロマノスによる、首都を取り巻く海の積極的な利用という点に着目し、彼の正統性主張の方策について検討する。」</p>	
報告者 13	野邊 晴陽 Haruhi NOBE
所属	東京大学大学院
発表題目	理性は信仰に貢献するか（トマス・アクィナスにおける信仰の理解について）
英文タイトル	Does human intellect contribute to faith?
<p>トマス・アクィナスは、人間の救済には「信じるべきことの知 <i>scientia credendorum</i>」が必要であると述べる。彼にとって信仰 <i>fides</i> は、知性を完成させる徳 <i>virtus</i> であり、それ自体で知的な性格をもつから、信じることと知ることとは対立しない。他方、ひとつの事物を同一の観点から理解しかつ信仰することはできないとも言われる。予め理解されていることを、改めて信じることはできないのである。では「信じるべきことを知る」とは何を意味するのか。このことの考察を通して、理性と信仰の関係の一側面を明らかにする</p>	
報告者 14	樋口 諒 Ryo HIGUCHI
所属	東京工業大学大学院/ 日本学術振興会特別研究員
発表題目	内接十字型教会堂にみる中期ビザンツ期の教会堂建築における創建年代推定の手法とその問題
英文タイトル	Dating Methodologies and its Problems of Middle Byzantine Cross-in-Square Church Buildings
<p>建築史において、建造物の創建年代は最も重要な事柄の一つである。しかし、建造物の創建年代は常に明らかとは限らず、しばしば推定に頼らざるを得ない。本発表では、中期ビザンツ建築の教会堂のうち最も一般的な建築形式である内接十字型を対象として、既往研究がそれらの教会堂の創建年代をどのように推定し、それらの信頼性や問題がどのようなものか論ずる。</p>	
報告者 15	藤田 風花 Fuka FUJITA
所属	京都大学大学院文学研究科
発表題目	ヴェネツィア領キプロスにおけるギリシア正教とカトリック —東地中海世界と対抗宗教改革—
英文タイトル	Greeks and Catholics in Venetian Cyprus: the Counter-Reformation and the eastern Mediterranean world

東地中海に浮かぶキプロス島では、12世紀末に支配権を握ったリュジニャン家とそれに続くヴェネツィアの統治期において、住民の大半を占める正教徒をカトリック信徒が支配していた。リュジニャン朝期（1192-1474）には、1260年に教皇によって、正教会のローマ教皇への従属が定められ、これはヴェネツィア支配期（1474-1571）にも継承された。

しかし、対抗宗教改革のなかでこの秩序が問題視されるようになる。本報告では、オスマン帝国の勢力伸張という背景をふまえ、東地中海世界における対抗宗教改革の意義について検討する。

報告者 16	元根 範子 Noriko MOTONE
所属	京都大学大学院文学研究科
発表題目	聖オーラヴ崇敬の伝播と奉獻施設：ノルウェーの事例より
英文タイトル	Propagation of veneration of St. Olav and the churches dedicated to St. Olav: The case of Norway
<p>ラテン・カトリック世界の北端に位置するノルウェー王国では、中世を通して国王聖人である聖オーラヴに対する崇敬が篤かった。崇敬は1031年の殉教以降に始まり、段階を経てノルウェー外にも広がっていった。本ポスター報告は北ヨーロッパにおける聖オーラヴ崇敬の伝播の過程を明らかにする研究の一端であり、奉獻施設の分布状況からノルウェー本土における崇敬の伝播がどのようなものであったかを示す。</p>	
報告者 17	吉田 瞳 Hitomi YOSHIDA
所属	京都大学大学院文学研究科
発表題目	中世末期ニュルンベルクの楽師
英文タイトル	The Minstrels of Late-medieval Nuremberg
<p>中世ドイツの帝国都市ニュルンベルクには、参事会お抱えのシュタットファイファーや、市壁の警護人である塔の番人など多数の楽師が存在し、日常から祝祭に至るまで様々な場で活躍していた。本報告では奢侈条令などに基づいて、彼等の実態について検討する。同時に楽師が担っていた音、特にラッパや太鼓の音などによる信号音に着目し、15世紀末から16世紀後半における同市の楽師の活動と、当時の「音の風景」についても考察したい。</p>	
報告者 18	龍 真未 Manami RYU
所属	東京藝術大学大学院
発表題目	《ヴァランシエンヌ黙示録》の造形原理——テキストの挿絵化について——
英文タイトル	The Apocalypse of Valenciennes: a Relationship between Text and Illumination

《ヴァランシエンヌ黙示録》（ヴァランシエンヌ、市立図書館 Ms. 99、9世紀第1四半期）は、造形的変遷の道筋においてノーサンプリアを経たと推察される黙示録写本である。主要モチーフのみを採用し副次的要素を省くという挿絵の造形的特徴は、ほぼ同時期に作られた《トリーア黙示録》（トリーア、市立図書館 Ms. 31）には認められない。本報告では、一連の挿絵「七つのラッパ」における叙述形式について考察し、新たな図像解釈を試みる。